

# 彼方の超新星に向かって

—『ハーツォグ』試論—

森本真一

Toward a Distant Supernovae: A Study on *Herzog*

Shin-ichi Morimoto

## Abstract

Moses Herzog in Saul Bellow's *Herzog* begins to write letters to the famous dead, apparently shocked by his wife's relations with a man for whom he found a job. In his letter to Nietzsche, for instance, Herzog observes that humankind lives mainly upon perverted ideas adding that Nietzsche's perverted ideas are no better than those of the Christianity he condemns. Nietzsche declared the death of God, but in Herzog's view death is God. Herzog also confesses that he struggled and drowned in Spengler's oceanic vision. Spengler was a very influential philosopher whom Bellow was interested in. According to Spengler, the West is in the process of decline. Herzog, like Bellow himself, seems to be desperately pondering on Western civilization including religious thoughts. But Herzog comes to sense that gases, minerals, heat and atoms are eloquent to him. He decides to stop writing letters and thinks it all right if he is out of mind. Bellow informs as follows near the end of *Herzog*: "the feeling that he was easily contained by everything about him *Within the hollowness of God*, as he noted, *and deaf to the final multiplicity of facts*, as well as, *blind to ultimate distances. Two billion light-years out. Supernovae.*" This passage might indicate the author's hope that men's spiritual agonies can finally be lead to a magnificent dream.

## 1 悩めるおどけ者ハーツォグ

本論考は著者ソール・ベローの西欧の文明への犀利な洞察を反映したと思えるかなり重厚で難解な小説『ハーツォグ』(*Herzog*)をある程度幅広く分析することを目論む。論を進めるに当たり幾分多岐に亘る文学者や思想家に言及し、わが国の近代文学更には東洋的な文化などについての著述を援用する。ために些か雑然とした観を免れなくなる恐れはあるが、これも宗教を含む諸々の思想的な要因が作中に充満し錯綜した様相を呈する『ハーツォグ』の不思議に奥深い魅力の根源に迫るためのひとつの試みかと筆者は考えている。気負った表現を使わせていただくと筆者は『ハーツォグ』という難攻不落の城に、大手がだめなら搦め手から遮二無二入り込もうとするようなつもりなのである。

1915年にユダヤ系移民の子としてカナダで生まれたソール・ベローは最初の長編『揺れ動く男』(*Dangling Man*)を1944年に発表して以来さまざまな手法による力作を物し続け、1976年にはノーベル文学賞を授与された。ベローは作品にユダヤ人を登場させる場合が多く、『ハーツォグ』の主人公モーゼズ・エルカナ・ハーツォグもユダヤ人という設定になっている。

『よしんば気がふれていたとしても、私は構いはしない』とモーゼズ・ハーツォグは考えた」(注1)。これが『ハーツォグ』の冒頭の文である。大学院で文化人類学を専攻し大学教員の経歴を持つ作者自身と同様ハーツォグは大学に勤務していたが、執筆に没頭するため辞職し父親が残した2万ドルでマサチューセッツ州ルディーヴィルの家を買った。ハーツォグの著作は順調に進まず、ロマン主義の研究を続行すべくある団体から金を支給してもらいながら「その成果が戸棚の古い旅行用の鞆のなかにあった——800ページに亘って全く焦点が定まらぬ混沌とした議論だ。思えば悲惨だった」(注2)。モーゼズの辞職を願った妻のマドリンはやがて辺鄙な土地での生活に飽きてしまい、ハーツォグ夫妻はシカゴに居を移した。だがマドリンはモーゼズと離婚したいと言い出し、しかもヴァレンタイン・ガースバックという男と関係を結んでいた。「自己点検を再開したハーツォグは彼が悪い夫だったと認めた——2回。最初の妻デイジーに彼は酷い処し方をした。2番目のマドリンは彼を破滅させようとした。息子と娘には愛情に満ちてはいたものの悪い父だった。両親には感謝しない子供だった。国家に対しては無関心な国民だった。兄たちや姉に優しさはあったが疎遠だった。友人との関係では利己主義者。恋愛において怠惰。賢さには鈍感。力には黙従。自分の心からは逃げ腰だ」(注3)。ハーツォグが彼自身の心から逃げ腰だと考えるのは自分を取り巻く人々に対して率直に感情を表出し伝達しない、あるいはできにくいということではないだろうか。この人物が周囲の人との折り合いを悪化させて絶望的に懊悩するのは、ひとつには彼がやや病的と言えるほどの潔癖さを帯びていて、それが多分に自虐的な省察をもたらし孤立感を増大させるためだと見ることもできるかと思える。

2度目の離婚により耐え難い痛手を受けてヨーロッパへ旅したハーツォグは、シカゴに戻ると精神状態がなおさら悪くなったのを感じてその時点で在職していた大学をもうしばらく休んでニューヨークに滞在することにした。ところがニューヨークの夜間学校で成人向けの講座を担当している間に一段と奇妙な状態に陥った。「ハーツォグ教授は深く沈思する人の無意識な鷹揚さを持っていた。そして学期の終わりごろになると講義に長い間隙ができた。話を中断して『失礼する』と呟き、上着のポケットのペンを探した。机を軋ませるほど強い筆圧で手に熱烈な力を込めて紙片に書き記した。没頭するハーツォグの目には黒い隅ができていた。蒼白の顔はあらゆるものを示した——正しくあらゆるものを。彼は熟考し推論し苦悶し、目覚しい二者択一を案出した——寛大で偏狭だった。目と口は無言のうちにすべてを明瞭にした——切望、偏執、悲痛な怒り。それが悉く見られた。受講者たちは3分も5分も完全に沈黙して待った」(注4)。

ハーツォグが最初のうち認めていたのは「愚者には愚かさに応じて返答せよ。自惚れて賢くならないように」とか「愚者には愚かさに応じて返答するな。自分が愚者の如くならないように」あるいは「ウォルター・ウィンチェルによればJ・S・バッハは鎮魂のミサを作曲するために黒い手袋をはめたらしい」というようなことだった(注5)。内容的には他愛がなくむしろゆとりの産物と取れる。だがそれだけでは終わらず「彼は呪文を掛けられて世界中のあらゆる人に手紙を書いていた。これらの手紙によって非常に気持ちを掻き立てられたため彼は6月の末から紙で一杯の鞆を携えてあちらこちらへ動き回った。(略)田舎に引きこもって彼は際限なく、熱狂的に書いた。新聞社に、公的な立場の人々に、友人や親族に、そしてついには死者に、名もない身内の死者に、そしてとうとう著名な死者に」(注6)と作者は一時期のハーツォグの有様を伝えている。『ハーツォグ』は大部な長編でありながらさほど波乱に富む事件が起きる訳ではなく、殆ど筋らしい筋はないということさえできる。大半はハーツォグの手紙の内容や執筆中の回想あるいは過去の会話の追懐の類によって構成されている。

それらの記述から察知できるようにモーゼズ・ハーツォグは間違いなくインテリで内面に向けての凝視は深刻だが、他者との関係においては往々にして滑稽な印象を与える。最初の妻デイジーにはハーツォグが自ら認めているとおり冷淡な態度を取った。しかしふたり目のマドリンは男と情を通じてモーゼズに離婚を要求した。マドリンの愛人ヴァレンタイン・ガースバックはモーゼズとは知り合いで、モーゼズはガースバック夫妻のような人たちを陰気なルディーヴィルに埋もれさせてはいけなとマドリンに言われて、ヴァレンタインにシカゴのエフ・エム放送局での教育部門のディレクターの仕事を捜してやった。マドリンと口論した挙句「ソファーに崩れた体勢で両腕を頭上に放置して脚は広げ、チンパンジーさながらの姿を露呈する」<sup>(注7)</sup> ハーツォグは「あの悩めるおどけ者」<sup>(注8)</sup> と呼ばれている。

セアラ・ブラッチャー・コーエンは「あの悩めるおどけ者」(“That Suffering Joker”)という題目の『ハーツォグ』論でハーツォグが「立派な意図と善意の努力にもかかわらず」<sup>(注9)</sup> シュレミールなのだ指摘する。シュレミール (schlemiel) はドイツの詩人兼博物学者アドルバート・フォン・シャミッソーの小説の主人公の名前から発した言葉でどじな奴、不運な奴、だまされやすいお人よしなどを意味する。「ハーツォグはイディッシュ文学の伝統的典人物であるシュレミールである。シュレミールは不運が重なる上にヘマばかり繰り返す男である。ユダヤ人の諺ではシュレミールとは『背中からころんで鼻を折る男』という定義がある。ころぶのは本人の落度だが、鼻を折るという点に不運がある」<sup>(注10)</sup> と田畑千秋氏は解説している。

専門領域の研究には優れていても世事に疎く非常識な人物が嘲笑的になるのは珍しくなからうが、ハーツォグの場合は単に学識を備えていながらそつなく生きていけないからおかしいというだけでなく、ユダヤ人としての特質、と言うよりユダヤ教への幾らか偏執的な思い入れが外の世界との違和感の遠因になると見るべきだろう。「ハーツォグの母はユダヤ人らしく見事な顎鬚に弱かった。母の家族でも年長者は皆濃くて豊かな、宗教心に溢れる顎鬚を蓄えていた。母はモーゼズにラビになって欲しかった。だのに今海水パンツと麦藁帽子を身に着け顔には重苦しい悲しみを募らせてそれを信仰に篤い生活で取り除こうと愚かにも切実に願う彼は彼自身の目に、ぞっとするほどラビとは違って見えた」<sup>(注11)</sup> とペローは記す。ハーツォグは何人かの女と交渉を持つ。そのなかにはそのという名の心のやさしい日本人もいた。「マドリンに関して君の見方は正しかったよ、その。私はあの女と結婚すべきでなかった。君と結婚すればよかった」<sup>(注12)</sup> とハーツォグは手紙に書いた。けれど彼はこの女との情交を「ヘブライの秩序の伝統と情熱と自制と美德と珠玉と傑作とその他のすべてが——多くは修辞だが事実も含む——私をこの乱れた緑のシーツと波打つマットレスに導いたのか」<sup>(注13)</sup> と嫌悪しながら想起する。交際した異性のことを思い出すとき何故ハーツォグは自分が背負っているヘブライの栄光をこれほど大仰に意識してしまうのだろう。『ハーツォグ』の悲劇と喜劇を招来するのは主人公の理想的なユダヤ教徒像からの逸脱による自責の念だと見るべきであろう。

すると作中に描かれたマドリンのカトリックへの改宗の経緯については、これをハーツォグにとってのユダヤ的なものとのかわりからどう捉えたらよいだろう。ハーツォグは医師エドヴィッグ宛の書簡にこう書き綴る。「伺った折に私が平静を欠いていたことは認めます。マドリンは私たちが別居しない条件として私に精神病の治療を受けさせました。マドリンが私は危険な精神状態にあると言ったのを御記憶でしょうか。私は精神科医を選ぶ自由は与えられました。バルト、ティリヒ、ブルンナ

—その他に関する御著書をお持ちのあなたを選ぶのに私は躊躇しませんでした。とりわけマドリンがユダヤ人でありながらカトリックに改宗してキリスト教に染まったのであなたに私があなを理解するのをお助けいただけるかと希望したのです」(注14)。しかしこの文面のすぐ後に「あなとガースバックが私の辿った全行程を狡猾に仕組んだ。奴らは頭を治すはずの者が私を排除しよう企んだ——病んだ男、甚だしく神経症的で、恐らくそれより悪い。とにかく治療が私を忙しくするだろう、症状ばかり気になって。私が週4日も午後は診療台の上にいるのが奴らにはわかる。そこで奴らは平気でベッドのなかだ」(注15) とハーツォグの憤慨が示されているように、エドヴィッグはハーツォグが精神病院に入るほどではないにしろ精神的動揺から生じる抑鬱症だと判定した。

要するにこの男は妻とその情夫にしてやられたのだが、ハーツォグにとって重大なのは表面化したマドリンの不貞の事実より宗教上の問題だったと推察できる。「度々繰り返されたあなたの御意見ではマドリンは信心深いとのこと。我々が結婚する前あながキリスト教に改宗していたとき、私は一度ならずマドリンと一緒に教会へ行きました。はっきり覚えています……ニューヨークで……」(注16) とハーツォグは引き続き手紙を通じてエドヴィッグ医師に訴える。マドリンは自分の信仰をハーツォグが尊重しなければふたりの間の一切の関係は不可能だと断言していた。ハーツォグはエドヴィッグとの対話で「マドリンは私をパリサイ人だと感じています。そう言います」と伝えて「20世紀のキリスト教徒にユダヤ教の形式主義者を云々する権利があるとお考えですか。ユダヤ教の立場からすれば、今はそうよい時代ではないです」と唱える(注17)。更には微かに不吉な兆しのある声を発する。「私はイエスが奴隷の道徳を広めて全世界を病的にしたというニーチェの考えに賛成しません。ですがニーチェ自身がキリスト教的歴史観を抱いて現在の瞬間を危機、古典的な偉大さからの転落、救出を必要とする腐敗もしくは邪悪としか見ません。私はそれをキリスト教的と呼びます。マドリンは明らかにそれを持っています。幾分かは私たちの誰もが持っています。害毒を免れねばならず救いと贖いを必要とすると考えます。マドリンは救済者を欲していますが、私はマドリンの救済者ではありません」(注18)。

この様子が精神病理学的に見て異常か否かは別として、ハーツォグがキリスト教とユダヤ教の対立的な図式を相当鮮烈に思い描いているのは明瞭である。彼はマドリンを改宗させた聖職者への手紙に「ユダヤ人が気高いクリスチャンの紳士淑女をどう理解するかは社会という劇場の歴史における奇妙な章です」(注19) と記す。マドリンは結婚式を教会で行って子供にもキリスト教の洗礼を受けさせたいと一時は言い張ったものの結局実行はせず、やがてカトリックの信仰を棄てた。マドリンにとってこの手のことがさほど重要でないのは歴然としている。モーゼズがこういう相手と暮しをともにしながらユダヤ教徒とキリスト者との間の障壁を破ろうなどと本気で悩んだとしたらそれは全くの無駄にほかならず、彼らの家庭生活は早晚破局に至る運命にあったと見るべきだろう。宗教の理念に則って生きる気構えを堅持している奇特な人でもない限り、ハーツォグの深慮がとても立派だなどと評価することはないだろう。絶対者的な神を想定しての抽象性を帯びた思弁に明け暮れ、安易で無難な人生の道を選択しないハーツォグは労多くして功少なく、損得勘定で言えば極めて損な生き方しかできない愚直で柔軟性を欠く間の抜けたシュレミールだと簡単に片付けられてしまうのだろうか。

## 2 西欧の英知への問い掛け

さて『ハーツォグ』の刊行は1964年だったが、わが国では1965年に小島信夫がこの作品と同様に

妻の不倫と夫婦の絆の消失を扱った『抱擁家族』を上梓した。小山田義文氏は『ハーツォグ』には「ベトナム戦争前期のアメリカ社会における家庭の崩壊という嵐の予兆と、それに巻きこまれた知識人の苦悩が、いわば先取りされた形で描かれていることに注意しなければなら」ず、「日本においても、『ハーツォグ』の翌年、小島信夫の『抱擁家族』が発表されたことは、決して偶然ではなかったといえる。志賀直哉の『暗夜行路』から『抱擁家族』に至る日本文学の道程と、『緋文字』から『ハーツォグ』に至るアメリカ文学のそれを、われわれは対比して考えることができよう」と提唱している(注20)。日米の文学の巨視的鳥瞰に基づく興味深い立論と思える。『緋文字』(原題は *The Scarlet Letter*) で作者ナサニエル・ホーソンはピューリタンの過酷な倫理に背いて牧師と姦通を犯した人妻に「私たちのしたことには独自の神聖さがありました」(注21)と語らせており、これはホーソンのピューリタニズムへの猜疑の表白と捉えることができるだろう。夫婦や家庭が素材として用いられそこに書き手の宗教観が投影されている点で、確かに『ハーツォグ』と『緋文字』には類似性が見出される。そしてホーソンとベローは人の心の内奥を一際深く探查した作家としてアメリカのみならず世界の文学の歴史のなかで重要な地位を占め続けることだろう。なお過ちを犯す妻を配して主人公の葛藤を詳述した『暗夜行路』に関しては、後ほど少し考察を行うつもりである。

小島信夫の『抱擁家族』の主人公三輪俊介は大学講師で外国文学の翻訳もしている。若いアメリカ人兵士と関係した妻時子は俊介に「こんなことあんたは堪えなくっちゃ駄目よ。冷静にならなくっちゃ。あんたは喜劇と思うぐらいでなくっちゃ。外国の文学にくわしいんだもの」(注22)と開き直り「悲劇のように考えるのは、もう古いわよ。あんたの物の考え方はそうじゃなかった？」(注23)と尋ねる。「何と身につまされるほどに的確に、戦後の(アメリカ的な)民主主義、自由主義、平等主義、合理主義が、そうしたものに慣れぬ、今まで閉ざされてきた、しかし善意をもって今までの閉鎖性を反省し、より近代的に寛大な心をもとうと懸命になっていた、素直な日本の心情に与えた衝撃の微妙なありようを、形象化し得ていることだろうか。当の加害者である妻の方が夫に、冷静になれと言い、それを夫が受け入れねばならぬ(受け入れないと、常々リベラルな『物の考え方』を表明している夫の自己矛盾になってしまう)ということは、まことに痛烈、と言うより痛切な皮肉であるが、実際、それは、『外国の文学にくわしい』、つまり、進んで西洋の近代的な『物の考え方』を取り入れようとし、またその責任を感じていた者にとっては、まさにその通りと言うしかない現実の自己矛盾の鮮やかな戯画化にはかならない。それはまさに、戦後のこの時期(昭和三十年代〔一九五五―一六四])の日本の文化の状態、日本人の精神の状況が、そんなふうにアイデンティティを失いがちな、一種混沌としたものであったことの、痛烈な表徴であったと言わなければならないのである」(注24)と大橋健三郎氏は述べた。アメリカ文学とりわけウィリアム・フォークナーの研究で世界的権威として知られる大橋氏はわが国の社会や世相に対しても称賛すべき慧眼を持っていると言えよう。妻の夫への接し方が無味乾燥で現実的、外来語を用いればドライでクールな所がこの『抱擁家族』を出版後まもないころに読んだ人たちに、よきにつけ悪しきにつけ優れてアメリカ的もしくは西洋的だと感じさせたことは容易に想像できる。明治以後の日本の近代化は西欧化とほぼ同義だったと見てよいだろうが、特に第二次世界大戦での敗戦とその後の惨状を経験したわが国において少なからざる数の知的な人たちがアメリカとは、また英語に習熟してアメリカを知ろうとする自分とは一体何なのかと真剣に悩んできたに違いあるまい。

『抱擁家族』の俊介はそのような問題意識と知識欲を旺盛に持った日本人の典型だと見ることがで

きよう。だが彼は飽くまでも一面のみにおいてではあるがアメリカ的な自由で合理的な考え方を身に付けた妻に裏切られ古いと非難されてしまう。三輪俊介の辿る軌跡は西欧との接近に伴う衝撃に驚き狼狽しながらもおかつ接触を繰り返して、違和感を強めていった日本の近代そのもののある側面を示していると捉えてよいのではないだろうか。また『ハーツォグ』はやはり主人公の妻との間のごちない断絶に題材を求めてその主人公に日常的、現実的な生活レベルでの疎外感や孤独感を味あわせながら、最終的には私的な感情の描出を遥かに超えて、ハーツォグが延々と認める書簡の文面によって見方次第では多分に暗澹とした状況下で人が如何に生きるべきかについての、西欧の文化的蓄積の基盤の上に立った提言と示唆を読者に投げ掛けてきている。『ハーツォグ』には『抱擁家族』の主人公に代表される現代日本の知識人に対する西欧の優れた知識人ソール・ベローからの有効なメッセージが凝縮されていると言っても過言ではあるまい。両作品を類比的に読むことが今日の世界の錯雑した動きの奥底にあるものを知るためのヒントを得ることにつながりはしないだろうか。

大橋健三郎氏は『抱擁家族』とベローの『ハーツォグ』との共通点に着目して「この両者の作品には、今日の高度にテクノロジー化もしくはテクノクラシー化した社会における、人間の根源的なコミュニケーションの破綻というテーマが、密接にかかわっている。高度の近代化ということは、人間の心情よりも、物神崇拜的な、合理化された人間関係と呼びよせ、例えば日本とアメリカ、ユダヤ教徒とキリスト教徒といった異質文化のエスニックな相剋をも、そうした、心情と合理的物質主義、『愛』を基調とするコミュニケーションとテクノロジーによる画一化、機械化との相剋へと、解き放ちがたく結びつけてしまう。これは、アメリカのプロテスタントイズムの伝統が資本主義と最もよく結びついたこととも関係があるが、しかし、ここではそのこと自体が問題になっているのではなく、文化もしくは人種の差異の状況が、人間のコミュニケーションへの願いとその阻害という今日の人間の大きな普遍的な問題と重なってくるところに、深刻な問題が存在するのである」(注25)と論じる。ここで大橋氏が重視したコミュニケーションの障害は『抱擁家族』では主人公の妻の確信犯的な振舞によるところが大きく、一方『ハーツォグ』のマドリンには女性としての、ひいては人間としての細やかな情感が欠けていてそれが思索の人ハーツォグとの齟齬につながるようだ。人間の生活のあらゆる局面が合理化され画一化され、果ては人間それ自体が機械的になってしまう趨勢のなかで心の触れ合いを切に求める主人公たちの苦悶を幾許かはユーモラスに、しかし哀惜や共感を抱いて探究したのが『ハーツォグ』と『抱擁家族』だったと言えそうだ。なお機械技術が発達した社会での原初的で素朴な意志疎通の願望については小山田義文氏による以下のコメントも参考になろう。「電子工学的コミュニケーションの網の目が、すき間もなく全世界をおおっているこの現代世界のなかで、手紙を書くという時代遅れの、まわりくどい、入念な手順は、人間対人間の直接的なコミュニケーションを、もういちど取りもどしてくれるはずのものではなかったか。ハーツォグはその手順にみずからを賭けた。錯乱の嵐におそわれながらも、人間は異常に正気であることができる」(注26)。

ハーツォグの手紙の一部は著名な哲学者や思想家に宛てたもので、また知人などへの書簡のなかにも歴史上の著名人への言及が見られる。ベローはこれらの手紙を必死に書き綴るハーツォグに『抱擁家族』の三輪だけでなく現代人全般が大いに役立てるべき過去の知的な営為の成果のエッセンスを託してくれているに相違なからう。エドヴィッグ宛ての書簡にハーツォグはヴァレンタイン・ガースバックからマルティン・ブーバーの著書を読むよう勧められたと記した。「ブーバーの考え方は無論御

承知と存じます。人間（主体）をもの（客体）に変えるのは誤りだという。精神的対話によって我とそれとの関係が我と汝との関係になる。神は人間の魂に去来する。あらゆる人たちはお互いの魂に去来する。彼らはときにお互いのベッドにも去来する。あなたは人間と対話する。あなたはその男の妻と情交を持つ」<sup>(注27)</sup>。これは一時ハーツォグが授業を中断して紙の切れ端に綴っていた諧謔と似ていなくもない。しかしここでハーツォグは親しい男に妻を奪われた憤懣と痛苦を冗談めかしながらぶちまけるだけなら、ユダヤ哲学者マルティン・ブーバーの論法的一端にまで言い及ぶ必要はなかったはずだ。ブーバーは我と汝のかかわりから信仰や愛が成立すると説いたが、ハーツォグは夫婦の霊的な交わりが薄れてみだりに肉体関係のみを享受する男女が横行するのは人間がものと化しつつあるからだと訴えるためにブーバーを持ち出したのではあるまいか。

ハーツォグのこのように概して否定的な社会観を作者ソール・ベローも持っていることは想像に難くない。ベローは随想風の作品で「私は学生のころシュペングラーについて熟考した」<sup>(注28)</sup>と述べた。そして『ハーツォグ』には「私はシュペングラーに熱中して、あの陰險なドイツ人の広大なヴィジョンのなかで格闘し溺死しようとしていた」<sup>(注29)</sup>と記されている。シュペングラーは西欧の文明が凋落の段階にあると捉えていた。ハーツォグは書簡の1通で「ほかでもないシュペングラー一派の規格化された術学——古臭い官僚の統制下での中等学校の文化的訓練から生まれたこの粗末な残忍さ」<sup>(注30)</sup>の弊害を告発し「我々は天才のヴィジョンがどれほど急速にインテリのための缶詰食料品となるかを忘れてはならない。シュペングラーの『プロイセン的社会主義』のザウアークラウトの缶詰、ありふれた荒地の光景、疎外という名の安易な精神刺激剤、つまらぬ族の虚偽と絶望に関する大言壮語。私にはこの馬鹿げた暗鬱は受け入れられない。我々は人類の全生命を論じているのだ。その話題はこんな脆弱と臆病には大き過ぎて深過ぎる——深過ぎて大き過ぎる」<sup>(注31)</sup>と憂慮する。缶詰の食べ物という喩えには熱意と創意を発揮せず形骸化した既成の思想や学問に追従することへの激しい憎悪が込められている。

なおベローは「封印された宝」(“The Sealed Treasure”)において「小説家がロマンティズムから受け継いだもののひとつは陳腐と醜悪に対する敏感さで、それが現代文学の些細な変化の多くを引き起こした——捻じ曲がった歯列、汚れた下着、吹出物がある店員。ここから勞せずして得る紋切り型の不幸、存在の苦々しさが生じたが、これはただのファッションだ」<sup>(注32)</sup>と評した。「当惑する大衆」(“The Distracted Public”)と表題を付した文章では「実に大勢の作家たちが増大しつつある戦慄への欲求に応じる以上のことを殆どしてこなかった。私にはこの欲求が、市場取引の用語で言えば、天井に達したと思える。それほどの興奮が、それほどの騒乱が制御され得るか。この種の疑問は多方面の解説者と専門家に向けられなくてはならない。予言が彼らの仕事だ。物語作者と小説家の関心の的は当惑する世界が無視して忘れていた人間の本質なのだ」<sup>(注33)</sup>と述べた。これらは思慮深い文学者の自己批判的な響きを持つと同時に、ことさら不安感を煽って大衆を当惑させる嫌いがある社会の全般的な動きを牽制した発言とも読める。ベローには深刻な厭世家の立場を取る者への執拗な敵意があると察せられる。『神は邪悪だ』とブルードンは言う。しかし世界革命の内情に新しい信条を探すとどうなるだろう。合理性や合理的な教義でなく死の勝利だ。我々が持つ殺戮の妄想が巨大な力なのだとわかる。神の殺戮を非難することから出発した人間の妄想が。すべての惨状の根底に人類の不満の感覚が潜んでいる」<sup>(注34)</sup>とハーツォグは思議する。奇異な挙動で夜間の学校の受講者を啞然とさ

せはしても、ハーツォグは本来教育的で建設的な人格を備えていたと見てよいだろう。

ベローはハーツォグに「この世代の哲学とは何か。神が死んだではない。その段階はずっと以前に過ぎた。死が神だと明言されるべきだろう。この世代は考える——そしてこれは今や思想のなかの思想だ——誠意があって傷付きやすくひ弱なものは永続して真の力を持つことがない」<sup>(注35)</sup>とも嘆かせている。死が神の座を占めたとは活力に乏しい人が目立つという意味かと思える。そしてこれこそ現在の社会の閉塞的な有様を如実に物語る言葉なのかも知れない。神は死んだと唱えたのはニーチェだが、「人類は概して歪んだ観念の上に生きています。歪められたあなたの着想も、あなたが非難するキリスト教の思想に勝りはしません」<sup>(注36)</sup>とハーツォグはニーチェへの手紙に書く。ハーツォグは西欧の英知と文明を真っ向から疑問視するつもりなのか。

### 3 自然との融合と東洋的知見

主人公が抱く想念はしばしば過激でも表面的には顕著な動きの少ない『ハーツォグ』にあって、殆ど唯一読者をはらはらさせるのはハーツォグが拳銃を携えて娘ジューンのいる家へ行く所だろう。ハーツォグは裁判所で母親が子供を壁に打ち付けて死なせた事件を知り、ジューンのことが気掛かりになったのである。けれど彼が目にしたのはガスバックがジューンを入浴させる姿だった。ハーツォグはガスバックに発砲すべきでないと認めて立ち去る。「だが実際ジューンはあのふたりから何を学べるだろう。あれほど甘ったるくていやらしくて不快極まる、一個の人間ではなく端切れのように、群集からもぎ取られたかけらのように見えるガスバックから。奴を撃つなんて——無意味な考えだ」<sup>(注37)</sup>と彼は妻の愛人に怨讐を超えた蔑みとある種の憐れみを覚えている。

その後ハーツォグはガスバックの妻フィービを訪ねて費用は全部負担するのでガスバックとの離婚訴訟を起こしてくれないかと相談する。ガスバックの姦通の相手がマドリンだとはっきりさせることによって自分がジューンの養育権を得るのにも有利になるからとハーツォグは頼むが、フィービはガスバックとの離婚を承諾しない。「あなたがほかの人たちの生き方を理解しようとしなないのは私の落度じゃないわ。あなたの見識が邪魔するのよ」<sup>(注38)</sup>とフィービは言う。ハーツォグは「入念で抽象性を帯びた知的作業が不要だと実感した——その作業が生き延びるための闘争であるかの如く常に己が身を投じてきた。けれど思考しないことが必ずしも致命的ではない。私は思考が停止したら死ぬと本当に信じたのか。このようなことを恐れるのは——正に狂気だ」<sup>(注39)</sup>。このときのハーツォグは「知覚の虜、証明を求められる者」<sup>(注40)</sup>を自称していたハーツォグとは随分様子が異なる。過去の一切が空虚に感じられて捨て鉢になっているのだろうか。必ずしもそうではなさそうだ。

ハーツォグは知人の協力を求めてジューンと会い、車を運転していたとき小型のトラックに追突される。拳銃不法所持の罪を問われたハーツォグは兄ウィルに保釈金を払ってもらってルディーヴィルの家へ帰る。「マサチューセッツ州西部の丘陵地帯での美しい、煌く夏の気象だった。微かに風があり小川の流れは淀みなく、木々は茂って緑が鮮やかだった。鳥たちにとっては、ハーツォグの地所が安らぎの場になってい」てハーツォグも「ぐっすり眠って包帯を脇腹に巻いてはいても気分は最高だった」とベローは告げる<sup>(注41)</sup>。またこのころのハーツォグについては作品の冒頭近くにも「ハーツォグは大きな古い家にひとりでいた。(略)ときおり彼は雑草がはびこった庭でぼんやりとしながら注意を払って棘の多い茎を持ち上げ木苺を摘んだ。睡眠はシーツなしのマットレスで取った——それは放置されていた夫婦の寝床だった——あるいはコートを掛けてハンモックで眠った。庭では丈が高く



禾の生えた草とばったと楓の若木が彼を囲んでいた。夜分に目を開けると星が靈性を帯びたかのように間近にあった。火は勿論のこと。気体——鉍物、暖気、原子がひたすら雄弁だ。早朝の5時外套に包まれてハンモックに横たわる男には」(注42) という記述を見ることができる。簡素で田園の自然に密着した理想的な暮らしぶりを描くだけでなく、主人公が腐心の果てに到達しつつある境地をも伝える心憎い一節ではなかろうか。ここには自己否定につながる無理が多い、言い方を変えれば不自然な思惟の習慣を脱しようとしているハーツォグの姿が読み取れる。

自然と言えば江藤淳氏が小島信夫の『抱擁家族』に関して次のように論じている。「『抱擁家族』は、日本の近代小説にはまれに見る anthropocentric な印象をあたえる。つまりそこでは作者の視線がいつも人間の上に注がれていて、外部の自然にそらされることがない。三輪俊介が、たとえば安岡章太郎氏の『海邊の光景』の主人公とくらべて、つねに人と人とのあいだで生きているように感じられるのはそのためである。これに似た印象をあたえる日本の近代小説を、私は夏目漱石の『明暗』以外に知らない。これはおそらく『抱擁家族』の劃期的な新しさであろう。しかし、注意しなければならないのは、これがかならずしも作者が人間中心の視点と価値観を信じている結果ではないということである。むしろ作者は描くべき自然を奪われ、人間に集中することを余儀なくされている」(注43)。anthropocentric は人間中心的という意味ではあるが、所謂ヒューマニズムもしくは人本主義あるいは人道主義とは違い、むしろ相互に理解し他者を気遣おうとしなくなる人間の異様な不健全さが強調されているのは明らかである。江藤氏自身『抱擁家族』の世界は「人間だけから、より正確に言えば『化物』になって浮遊している人間だけから成立している」(注44) と記した。

江藤氏は「少なくとも小説が凡人の生活を素材にするという近代の慣行に忠実なかぎり、そして作家が概念からではなくて彼の目に映じる世界から出発しようとするかぎり、作家は『自分』のためにも『他人』のためにも生きず、希望も持ち得ないがさりとて絶望の明晰さにも到達できぬ人物たちを描くほかはない。これが小島氏の試みようとしたことである。つまり氏の作家的主張である。この作家的主張が生み出した三輪俊介という人物を、たとえば志賀直哉氏の『暗夜行路』の主人公時任謙作と比較すれば、『抱擁家族』の世界と『白樺』派の世界との距離は、というよりその対極性は自明なものとならざるを得ないはずである」(注45) と推論して「志賀氏の主人公は絶対者になることに少しも『とまどい』を感じない。彼はどんな『責任』も感じず、彼以外の何者をも『救おう』としない。そして救済は伯耆の大山の夜明けに、謙作が『自然』との合体を体験する至福感のうちにあたえられる」(注46) と指摘した。人間関係が穩健に保てない人物としての謙作の自然との触れ合いについては、ハーツォグの場合と比較対照的に考え合わせてみるのもあながち無意味ではなかろう。

『暗夜行路』の主人公時任謙作は母親と祖父との過失の結果として生まれた。しかも妻の直子は従兄と関係を持つ。謙作は大山に旅して寺の離れに住む。「永年、人と人と人との関係に疲れ切ってしまった謙作には此所の生活はよかった。彼はよく阿弥陀堂という三四町登った森の中にある堂へ行った。特別保護建造物だが、縁など朽ち腐れ、甚く荒れはてていた。然しそれが却って彼には親しい感じをさせた」(注47)。謙作は直子への書状に「手紙出さぬようにいったが、急に出したくなって出す。私は旅へ出て大変元気になり、落ちついている。此所へ来た事は色々な意味で、大変よかった。毎日読んだり、何かしら書いたりしている。雨さえ降らねば、よく近くの山や森や河原などへ散歩に出かける。私はこの山に来て小鳥や虫や木や草や水や石や、色々なものを観ている。一人で叮嚀に見ると、

これまでそれ等に就いて気がつかず、考えなかった事まで考える。そして今までなかった世界が自分に<sup>ひら</sup>けた喜びを感じている。お前に話したかどうか忘れたが、数年来自分にこびりついていた、<sup>おも</sup>想い上った考が、<sup>かんがえ</sup>こういう事で気持よく溶け始めた感がある」(注48)と記す。

山に登ろうとした謙作は疲労がひどく途中で断念せざるを得なくなる。「疲れ切ってはいるが、それが不思議な陶酔感となって彼に感ぜられた。彼は自分の精神も肉体も、今、この大きな自然の中に<sup>とけこ</sup>溶込んで行くのを感じた。その自然というのは芥子粒程に小さい彼を無限の大きさに包んでいる気体のような眼に感ぜられないものであるが、その中に溶けて行く、——それに還元される感じが言葉に表現出来ない程の快さであった。何の不安もなく、睡い時、<sup>ねむり</sup>睡に落ちて行く感じにも多少似ていた」(注49)。さきほど引用した箇所からハーツォグが彼を取り巻く森羅万象に注意または敬意を払うようになったことがわかる。謙作は卑小な自分の存在に気付いた。両者が誇大妄想的な性癖を恐らく無意識のうちに抑制するのに自然界の治癒力が大きく働いたと見てよいだろう。

謙作は医師の診察を受けてコレラの疑いさえ持たれ、直子が駆け付ける。「謙作は疲れたらしく、手を握らしたまま眼をつむって<sup>ま</sup>了った。穏かな顔だった。直子は謙作のこういう顔を初めて見るように思った。そしてこの人はこの<sup>ま</sup>儘、助からないのではないかと思った。然し、不思議に、それは直子をそれ程、悲しませなかった」(注50)。直子が「助かるにしろ、助からぬにしろ、兎に角、自分はこの人を離れず、<sup>と</sup>何所までもこの人に<sup>つ</sup>随いて行くのだ」(注51)と思いながら謙作の顔を見詰める所で『暗夜行路』は終わっている。妻の不貞を扱い、主人公が自然に身を委ねて安寧を得る想定においてこの長編にはベローの『ハーツォグ』と通底する部分がある。尤も謙作を自然に思いやる直子はハーツォグが事故で負傷した際にも警察官に対してハーツォグの異常性を訴えていたマドリンとは全く印象が違うが。ベローはこんなマドリンを通じて読者のハーツォグへの同情を強めようとしたのだろうか。あるいは短期間にせよカトリシズムに帰依したマドリンが身に付けていてもよいはずのキリスト教的な慈愛への不信をちらつかせていると考えることができないだろうか。ハーツォグとマドリンとの殺伐とした絡み合いを描くソール・ベローの脳裏に秘められているであろうキリスト教対ユダヤ教という相剋が『ハーツォグ』に『暗夜行路』とはもとより異質の重みを加え、しかもその重みはキリスト教やユダヤ教に特段精通していない日本人には簡単に計り知ることができるものではないと言べきなのだろうか。

『暗夜行路』のあとがきに「謙作は大体作者自身。自分がそういう場合にはそう行動するだろう、<sup>あるい</sup>或はそう行動したいと思うだろう、或は実際そう行動した、というような事の集成と云っている」(注52)と書かれている。では時任謙作が、そして志賀直哉が辿った心的な彷徨とはどのようなものだったのか。志賀は一際激烈な性質を備えた人物だった。自伝的な短編「大津順吉」で順吉は著名な宗教家内村鑑三をモデルにしたと言われるU先生の姦淫の戒めを守ろうとするが、「絶えず私を苦しめてきたものは私の肉体に<sup>わ</sup>湧く力であった」(注53)と告白する。女中の千代と性交渉を結んでしまい、家族が順吉と千代との結婚に反対して千代は暇を出される。順吉は力任せに鉄亜鈴を座敷に叩き付ける。それから「私は戸棚の段に<sup>ひじ</sup>肘をつけて興奮から起こる体の<sup>からだ</sup>芯の震えをおさえるようにしてじっとうつ伏しになった。と、私の頭にふと、下に寝ている岩井の様子が浮かんできた。鼻の低い顔色の悪い、しかし<sup>ふと</sup>肥った、いかにも<sup>いなかもの</sup>田舎者らしい新しく来た書生が、真夜中寝ているすぐ上の天井に今のえらい音を聞いて闇の中にムックリ起き上がった様子を想い浮かべてしまうと、私には堪えられな

いおかしさがこみ上げてきてひとりクスリクスリ笑わずにはいられなかった」(注54)。ただの身勝手と言ってしまうまでもだが、中村光夫氏は「この思ひやりのなさは決して彼の若さや生れつきだけのせりではありません。大切なのはこの非情な自我崇拜が、彼の美学であり、倫理であり、ほとんど宗教であったといふことです」(注55)と断じた。傍若無人という言葉があるけれどそれどころではなく、志賀は神の死を宣言したニーチェよりなお大胆だったのだろうか。またなりゆき次第では志賀直哉が『ハーツォグ』に近い作品の構想を持った可能性も十分あり得よう。

「大津順吉」が『中央公論』に掲載されたとき志賀直哉はまだ30歳に達していなかった。『暗夜行路』は長期に亘って発表されたが完結を見たのは志賀が50代中盤の1937年だった。「初期の作品にキリスト教的色調が少しあるが、それは青年期の特徴である素朴な観念尊重、理想主義にすぎない。『暗夜行路』の最後の謙作の心境は強いていえば、宗教的なものといふ得るが、(略)それは宗教的解脱といったものではなく、あくまで個我に執して生きた後の一つの精神安定というべきものである。それは汎神論的なものの感じ方というべきで、清浄な静かな大自然に接し、病気という肉体的な条件も加わった一種の安息、やすらぎの状態とでも云うべきものであろう」(注56)と今野宏氏が「志賀直哉の調和的精神」と題する論考において指摘した。志賀の稀有な感受性の作用の一面を簡潔に解き明かした文章と思える。尖鋭で頑強な個性を柔和にして外界の事物と融合させていく過程が志賀の人生と創作歴だったのだろうか。

70歳に近付いた志賀は若かったころ「此地球が我々の進歩発達に条件が不適切になる前に、出来るだけの発達を遂げて、地球の運命から自分達の運命を切り離すべきだと思つた。これは大変便利な考へ方で、この考へをもつてすれば、大概の現象は割り切れた。究極にさういふ目的があるのだと思ふと、如何なる病的な現象も肯定出来るのである。さういふ人類の意志の変則な現はれだと思ふ事が出来るから、<sup>(すべ)</sup>総てが割りきれた。飛行機の無制限な発達も、原子力も(その頃はこんなものはなかったが)総て賛美する事が出来るわけである。私は三十二三歳まではさういふ空想に捕はれ、滅茶苦茶に興奮する事がよくあつたが、どうかすると急に深い谷へ<sup>さかお</sup>逆落としに落とされた程に不安焦慮を感じる事がよく有つた。私はそれに堪へ兼ね、東洋の古美術に親しむ事、自然に親しむ事、動植物に接近し親しむ事などで、少しづつそれを調整して行くうち、いつか、前の考へから離れ、段々にその丁度反対の所に到達し、<sup>(ようや)</sup>漸く心の落ちつきを得る事が出来た。以来三十何年、その考へは殆ど変わらずに続いてゐる」(注57)と語った。

これがかつては自らを教祖とする宗派でも打ち立てかねなかつた男の言葉である。キリスト教によってすら満たされなかつた激しいエゴの持ち主が東洋の古美術に触れて苛立ちを免れたと知らされると、西欧の高度な文明にも拮抗し得る東洋古来の知恵への関心が喚起されてくる。思うに志賀はあるとき機械の力に依存する物質文明と精神文化、近代性と前近代的乃至は反近代的な発想などの対蹠的な構図を築き、しかも次第にそういう対蹠を乗り越える術を求める方向に進んだのではないだろうか。ところでベローはハーツォグに「魂は力強さを要求する。そうは言っても廉正は人類を退屈させる。孔子を再読せよ。膨大な人口を抱えると世界は中国のようになる覚悟をしなくてはならない」(注58)と書かせた。何やら読者の意表を突くような件だ。これがどの程度ベローの認識を代弁しているかの判定は難しかり。特に深い意味が付与されているとは思わない方がよいのかも知れない。しかし志賀直哉同様あるいはもっと強くキリスト教に懐疑と反感を抱いていたかと思しい、そしてハーツォグの書簡を通じて西欧の文化的伝統へのかなり広範で抜本的な発問をしたソール・ベローが、東洋の偉

大な思想家の教えにもしも共鳴していたとすれば注目に値しよう。

ハーツォグは書簡のひとつでハイデッガーに対して「あなたが『平凡な日常への埋没』という表現で何を意味したのか知りたいです。それがいつ起こったのか。そのとき我々はどこに立っていたのかを」(注59)と尋ねた。晩春のころ「説明して決着を付け根拠を示して展望させ明瞭にして修復する欲求に支配されていた」(注60)ハーツォグが、同じ年の夏には「歴史意識の増大の奇妙な結果として人間は生き延びるために説明が不可欠だと考えるようになった。彼らは置かれている状況を説明しなくてはならない。そして説明されない人生が生きるに値しないとすれば、説明される人生もまた耐え難い。『統合か消滅か』。これが新たな法則なのか」(注61)と思案する。また『ハーツォグ』は「このとき彼は誰に向けても一切伝えるべきことがなかった。何もなかった。ただの一言さえも」(注62)と締め括られている。こうした主人公の一種の卓見を、私がさきほど問題にした孔子や中国の、更にはやや漠然と東洋的な才知とでも呼ぶべきものと少しく関連付けて考察できないだろうか。

夭折した小説家中島敦は幾つかの作品で中国を舞台にした。「弟子」は孔子とその度量に圧伏された子路の物語である。「名人伝」には戦国時代に弓道を極めんと望んだ紀昌という人物を配した。紀昌は大家甘蠅老師に「好漢未だ不射之射を知らぬと見える」(注63)と諭され9年を甘蠅の許で過ごした。山を下りて趙の都に戻った紀昌は弓を捨てて来た様子で「至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなし」(注64)と言う。確固とした漢学の基盤を持つ中島敦は、この作品で西欧の合理主義や成果主義的な考え方とは到底相容れ難い特異な達人像を見事に描き出したと言えよう。「既に早く射を離れた彼の心は、益々枯淡虚静の域にはいつて行ったようである。木偶の如き顔は更に表情を失い、語ることも稀となり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至った。『既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳の如く、耳は鼻の如く、鼻は口の如く思われる。』というのが老名人晩年の述懐である」(注65)と中島は記す。

紀昌は他者と技術を競う気がなくなり、矢を放たないばかりか息をすら吐かずに済ませているかの如き静けさを見せた。仮にソール・ベローが紀昌の心境を知ったらそれが理想的だと思うのではなかろうか。ハーツォグは2年前に自分を出し抜いて注目を浴びたパークレーの教授マーメルスタインに手紙を認める。「幾つかの事柄であなたは私を凌駕され、私は惨めな気分になりました——私の業績の大半を無駄なものにしたあなたを終日恨みました(ウォレスとダーウィンでしょうか)。しかしどれ程の努力と忍耐がこのような著作に注ぎ込まれたかを私は熟知しています——多大の探査、研究、総合に私はひたすら敬意を表します。改訂版を刊行されるときには——または新たな著作を出版されるでしょうか——これらの事柄を少し語り合えればとても嬉しいです。以前書こうとはしたものの投げ出してしまってもう決して書くことのないだろう本の一部があります。その題材を御自由になさって結構です」(注66)。これは研究への熱意を失った負け犬の遠吠えだとは言えないだろう。むしろ焦燥感から解き放たれてある意味で純粋に学問と相対するハーツォグは、今や紀昌や甘蠅のような名人の域に入ったと見ることもできよう。

#### 4 窮極の調和を志向する思想家ソール・ベロー

穏和で謙虚になったハーツォグはマドリンとガースバックとの関係についても「君はマドリンを好きなようにするとよい。マドリンを享樂して——狂喜してくれたまえ。けれどあの女を通じて私に到

達することはできない。マドリンの肉体のうちに君が私を捜し求めたのはわかっている。だがもう私はそこにはない」(注67) とガースバックへの手紙に書くことができる。ハーツォグは「親愛なるマドリン——君は本当に恐ろしい女だ。驚嘆する。何という人か」(注68) と書いてレストランでの食事の後にマドリンがナイフの刃に自分の顔を映して口紅を直したのを今では喜ばしく回顧する。岡倉天心は『茶の本』(*The Book of Tea*)で「大陸間で激しい言葉を浴びせ合うのはやめ、お互いが半球の半分ずつを手に入れることでより賢くはなくとも真剣になろうではないか。我々は異なる線の上を歩んで来たが、相互に補完することが望ましい。西洋は膨張して慌しくなった。東洋は攻撃に弱い調和を作り出した。西洋の人々は信じるだろうか。東洋がある点では西洋より優れていることを」(注69) と主張した。攻撃に弱い調和を作り出すとは妻とその情夫とのかかわりを通じてのハーツォグの変貌にかなりよく当てはまる言葉ではないかと感じられる。なおハーツォグがシュレミールつまり不運でまされやすいお人よしだという見方があるのは前述のとおりだが、このシュレミールのイメージは岡倉が考えた西洋との関係性における東洋の位置付けとどこか似ていないだろうか。

ハーツォグは兄のウィルにマドリンが「私の人生にイデオロギーをもたらしました。破局と関連するものです。詰まる所現在はイデオロギーの時代です。あの女は好意を持つ者の子供を生みはしないでしょう」(注70) と言う。ハーツォグが親密に交わる女のなかにラモーナがいる。「ラモーナはレキシントン通りで花屋を営んでいた。若くはなかった——恐らく30代だろう。正確な歳はモーゼズに告げなかった——しかしすばらしく魅力的で徹かにエキゾチックで教養があった。商売を受け継いだときラモーナはコロンビアで美術史の修士号を取得しようとしていた。事実この女はハーツォグの夜間の授業を受けた。彼は学生との情事は持たない主義だった。明らかに情事のために作られたラモーナ・ドンセルのような学生とでも」(注71) とベローはラモーナを紹介する。更に「この女は背が低かったけれどふっくらとして豊かな容姿で丸みのある尻と堅い乳房を持っていた(これに類する諸事はすべてハーツォグにとって大切だった。モラリストを自認するにせよ女の胸の形には重要な意味があった)。ラモーナは顎に不満だったが優美な喉には自信があったのでまっすぐに顔を上げていた。小気味よく早足で歩き、カスティリア人のように元気よくヒールで音を立てた。ハーツォグはこのこつこつという響きに魅せられた」(注72) とも書かれている。「君は私の大きな慰めだ。我々はある程度安定して制御が可能な、または多少狂気じみた要因を扱っている。それは確かだ。柔和で温厚に見えても私には激しい気質がある。君はこの気質がひたすら求めるのは性的な快樂だと考え、我々はこの気質に性的な快樂を与えているのだから一切がうまく運ばないはずはないだろう」(注73) とハーツォグはラモーナへの心のなかの手紙に記す。

ベローが長大な『ハーツォグ』で提示した主人公の深刻な問題は単に性欲を満足させれば解決する程度のもので、ハーツォグはそのためにのみラモーナを必要としたと見ることも可能だろう。ウィルにラモーナにはイデオロギーはないのかと聞かれたハーツォグは「幾らかあります。セックスにまつわるイデオロギーです。それについてラモーナは相当狂信的ですよ」(注74) と答える。観念的な事柄の飽くなき考究に性的衝動更にはより根源的な生の欲動が取って代わる状態をベローは望ましいと捉えているのだろうか。この点は定かでないがハーツォグがラモーナから有益な助言を受けるのは間違いない。「実際的になるのは少しも不名誉ではないわ。明瞭に考えないのは自尊心か何かのせいじゃないかしら。自分を犠牲者にすることで優位に立とうとしてるんでしょ。そんなことは無駄だともうわ

かっているはずよ」<sup>(注75)</sup>とラモーナは忠告する。被害者意識と背中合わせになった自己愛や尊大さを唾棄して現実と直面する勇気と活性のようなものを、ハーツォグはラモーナから授けられている気がする。

ルディーヴィルでの独居を始めたハーツォグは思う。「ハーツォグの馬鹿げた大建築。その誠実で愛すべき愚かさや人格に秘められた邪悪への記念碑。アングロ・サクソン系白人新教徒のアメリカにおける堅固な基盤を確保するためのユダヤ的闘争の象徴」<sup>(注76)</sup>。自らをこのように評価できるのはラモーナの感化による所が大だと見てよいだろう。ついに彼は気が確かなのを明らかにするために通院を拒否して手紙の執筆をやめようと思うのだが、その少し前に「しかしよしんば気がふれていたとしても、私は構いはしない」<sup>(注77)</sup>という記述が見られる。これは本論考の冒頭付近でも引用した『ハーツォグ』の最初の部分とほぼ同じことの繰り返しである。ベローはどんな意図を持ってハーツォグの開き直りを強調したのだろう。知力に長けたハーツォグが堂々巡りのような思考の回路を辿る姿は、人間の精神的乃至は心情的な面での活動とは容易にその成果が計測できるものではなく、往々にして正気と狂気の区別さえ不明瞭な場合があると示唆しているというのが可能なひとつの解釈ではなかろうか。あるいは『茶の本』を執筆したころの岡倉天心と同じようにベローも西洋が東洋より進んでいるとは限らないと提言するために、ハーツォグを西欧の文明の粹に関する果てしない考察に明け暮れるよう仕向けたとも思える。しかしあまり実り豊かとは言えない、いやそれどころか全く無益とすら見える挙動と思惟の過程で、ハーツォグはそのような辛苦を遥か遠方から客観視するかの如き壮大なパースペクティブを持った。それを示す箇所を引用してこの試論を終わることにする。「静寂が彼を支えた。そして素晴らしい天候も。『神の虚空のなかで』自分の周りのあらゆるものに苦もなく包含される実感、と彼は書き留めた。『そして最終的な事実の多様性に耳を塞ぎ』そのうえ『最も長い距離をも意識しない。20億光年の彼方。超新星』」<sup>(注78)</sup>。超新星は普通の新星より何万倍か明るい新星のことである。また20億光年とは実に気が遠くなるほどの距離だ。ベローがこれらの語に託したのはハーツォグの、あるいはより広く人間の、と置き換えてもよかろうが、進歩の検証しにくい円運動的な営為も、やがては眩い星の輝きに似た希望につながるという願いだったと考えられる。だとするとソール・ベローは『ハーツォグ』を通じて巧みな作話で読者を終始引き付けるエンターテイナーの素質ではなく、人間を肯定し調和を志向する健全で大らかな思想家たらんとする意欲を顕示したと推察できよう。

#### 注

1 Saul Bellow, *Herzog* (The Viking Press, 1975), p. 1. 英文からの邦訳は筆者による。なお以下本論考中の英語の文献からの引用はすべて筆者が日本語に訳した。

2 *Ibid.*, p. 4.

3 *Ibid.*, pp. 4-5.

4 *Ibid.*, p. 2.

5 *Ibid.*, p. 3.

6 *Ibid.*, p. 1.

7 *Ibid.*, pp. 10-11.

8 *Ibid.*, p. 11.

- 9 Harold Bloom, ed., *Saul Bellow's Herzog* (Chelsea House Publishers, 1988), p. 39.
- 10 田畑千秋『ソール・ペローを読む』(松籟社 1994年) 128 ページ
- 11 *Herzog*, p. 22.
- 12 *Ibid.*, p. 167.
- 13 *Ibid.*, p. 170.
- 14 *Ibid.*, p. 53.
- 15 *Ibid.*, p. 53.
- 16 *Ibid.*, p. 62.
- 17 *Ibid.*, p. 54.
- 18 *Ibid.*, p. 54.
- 19 *Ibid.*, p. 112.
- 20 小山田義文『アメリカ ユダヤ系作家』(評論社 1976年) 64 ページ
- 21 Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter* (New American Library, 1959), p. 186.
- 22 小島信夫『抱擁家族』(講談社 1971年) 60 ページ
- 23 同書 61 ページ
- 24 大橋健三郎『「頭」と「心」一日米の文学と近代一』(研究社出版 1987年) 148 ページ
- 25 同書 161 ページ
- 26 『アメリカ ユダヤ系作家』65 ページ
- 27 *Herzog*, p. 64.
- 28 Irving Howe, ed., *Saul Bellow: Herzog* (The Viking Press, 1976), p. 385.
- 29 *Herzog*, p. 233.
- 30 *Ibid.*, p. 75.
- 31 *Ibid.*, pp. 74-75.
- 32 Saul Bellow, *It All Adds Up* (Viking, 1994), p. 63.
- 33 *Ibid.*, p. 169.
- 34 *Herzog*, p. 290.
- 35 *Ibid.*, pp. 289-290.
- 36 *Ibid.*, p. 319.
- 37 *Ibid.*, p. 258.
- 38 *Ibid.*, p. 262.
- 39 *Ibid.*, p. 265.
- 40 *Ibid.*, p. 72.
- 41 *Ibid.*, p. 309.
- 42 *Ibid.*, p. 1.
- 43 江藤淳『成熟と喪失—「母」の崩壊—』(河出書房新社 1973年) 125 ページ
- 44 同書 126 ページ
- 45 同書 94 ページ
- 46 同書 94 ページ
- 47 志賀直哉『暗夜行路』(新潮社 2003年) 471 ページ
- 48 同書 483-484 ページ
- 49 同書 503-504 ページ
- 50 同書 513-514 ページ
- 51 同書 514 ページ
- 52 同書 519 ページ
- 53 志賀直哉『和解』(角川書店 1976年) 99 ページ

- 54 同書 163 ページ
- 55 中村光夫『志賀直哉論』(筑摩書房 1974年) 85 ページ
- 56 日本文学研究資料刊行会編『志賀直哉 I』(有精堂 1977年) 104 ページ
- 57 志賀直哉『志賀直哉全集 第八巻』(岩波書店 1999年) 301-302 ページ
- 58 *Herzog*, p. 311.
- 59 *Ibid.*, p. 49.
- 60 *Ibid.*, p. 2.
- 61 *Ibid.*, p. 322.
- 62 *Ibid.*, p. 341.
- 63 中島敦『中島敦全集 3』(筑摩書房 2003年) 119 ページ
- 64 同書 120-121 ページ
- 65 同書 122 ページ
- 66 *Herzog*, p. 315.
- 67 *Ibid.*, p. 318.
- 68 *Ibid.*, p. 318.
- 69 Okakura-Kakuzo, *The Book of Tea* (Kenkyusha, 1970), pp. 7-8.
- 70 *Herzog*, p. 334.
- 71 *Ibid.*, p. 14.
- 72 *Ibid.*, p. 16.
- 73 *Ibid.*, p. 16.
- 74 *Ibid.*, p. 338.
- 75 *Ibid.*, p. 195.
- 76 *Ibid.*, p. 309.
- 77 *Ibid.*, p. 315.
- 78 *Ibid.*, p. 325.

(もりもと しんいち 英語コミュニケーション学科)